



# 横浜銀行 ニューヨーク駐在員事務所

週間トピックス Vol. 521 (2021. 4. 1)

<今週のトピックス>

## テイクアウト用の箱で大富豪

アメリカで、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染者第一号が出て、一年が経ちました。人々の価値観、生活様式、社会の仕組みなど世の中の多くのものが変化してきました。また、その変化のスピードが速かった国の一つがアメリカかもしれません。

当たり前のことですが、美味しいレストランの料理を食べるには、インドアダイニング、アウトドアダイニング、テイクアウト、そしてデリバリーの方法があります。

COVID-19の感染拡大の防止を目的とした、インドアダイニングの禁止（州によってはアウトドアダイニングも禁止）により、レストラン業界の経営は、厳しい状況に追い込まれてきました。生き残りをかけて、テイクアウトあるいはデリバリーに活路を見出すレストランが増えています。

ファーストフード店や中華料理屋、ラーメン屋だけでなく、高級ステーキレストラン、高級なお寿司屋、ミシュランで三ツ星を取るような世界的に有名な高級レストランまで、テイクアウト・デリバリーを開始しており、今やテイクアウトをやっていないお店を探すこと自体が難しいのではないのでしょうか。考え方を換えれば、予約困難なお店の料理を自宅でも気軽に味わえるような世の中になったとも言えます。



今日、取り上げるのは、「テイクアウト用の箱」についての話題です。

レストランのシェフやオーナーは、COVID-19の感染拡大の長期化を受け、インドア・アウトドアダイニングの需要は減少するという予想から、よりクオリティの高い箱へ投資することを考えているようです。

高級レストランの多くは、最近まで料理のテイクアウトには、対応していませんでした。そのため、家に到着するまでロブスターやお寿司を最高の状態に保つ方法を大急ぎで研究しているところです。

ニューヨークの高級和食店の例をご紹介します。普段は、お寿司のネタの上にキャビアが乗っている1人150ドルのコース料理を提供しているようなお店です。

テイクアウトでも、握り一貫10ドル程度、巻物一本で20ドル以上、鉄火丼で78ドル、お任せセットで120ドルもするような価格帯ですが、お客さんがその値段に納得するように、料理を包む方法を見つけることが課題だったようです。

握りを入れる容器は、まるで高価な靴やバッグに使うような包装デザインで、店の入り口の壁面にあるような芸術的な魚の絵をあしらっています。こだわり抜いた、オリジナルの持ち帰り容器を作るのに、7万ドルを費やしたようです。

お客さんの間でこのパッケージは、好評を博し、ソーシャルメディア（SNS）でも写真が次々と投稿されていました。



また、あるステーキレストランの例ですが、フレンチフライ付きのステーキを持ち帰りに販売できないことが大きな不満の種だと、総料理長は言っています。



そして、「蒸されて湿っぽくならず、揚げたてのカリッとした状態をキープできるテイクアウト用の箱を考案すれば、きっと大富豪になれる」とも言っています。

しけたフレンチフライだと、ステーキが台無しになるのでしょう。

カリカリのフレンチフライを自宅までお届けできるような持ち帰り容器を作ることができれば、このテイクアウトブームのなかで、画期的な発明になることは間違いなさそうです。

さて、アメリカの持ち帰り容器と言えば、映画やドラマに度々登場する中華料理用の四角い箱ではないでしょうか。この四角い箱ですが、1984年に、日本のオリガミにヒン

トを得て、作られたようです。当時は、生ガキを持ち運ぶための容器として使われていました。食べ物が漏れることなく、使い捨てができ、そこまで高くないことが評価され、この容器は、中華料理屋のテイクアウトビジネスの躍進とともに大ヒットしました。Dunkin' Donuts のコーヒー容器を再設計したある人物は、「日本のオリガミが、本当にクールな持ち運び装置（容器）をもたらした」と高く評価したようです。今では、日常的に目にするこの四角い箱ですが、まさにロングセラーのテイクアウト用の箱と言えるでしょう。



アメリカのレストランで飲食をしていると、料理のボリュームが多く、食べきれないときが多々あります。その場合、To Go Box を頼むのですが、一昔前は、これを Doggy Bag（ドギーバッグ）と言っていたようです。家に持ち帰って「犬のエサにする」という意味です。犬のエサにするという名目で持ち帰った食べ物ですので、何かあっても自己責任ですよというメッセージにもなっています（実際に、人間が食べて、食中毒になってもレストラン側は責任を負わないという意味で。犬だったら何かあっても問題がないのかという疑問は残りますが）。食品ロス問題を考えると、この Doggy Bag の文化は、もう少し日本でも浸透しても良いと思います。



たかが箱、されど箱。時代によって生み出される箱が、また新たな世の中の変化を生み出すことになるのかもしれない。

(出所：Wall Street Journal, New York Times, Kissaki, Boeufhaus, Smithsonian Magazine)

- ・本レポートは情報提供のみを目的として作成したものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。
- ・ご利用に関しては、すべてお客さまご自身でご判断くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。
- ・本レポートは信頼できると思われる情報に基づいて作成していますが、当行はその正確性を保証するものではありません。
- ・本レポートのご利用によりお客さまがいかなる損失、損害を受けられても当行は一切の責任を負いません。
- ・本レポートはお客さま限りでご利用くださいますようお願いいたします。